

る位置づけが必要であり、本遺跡の存在との関わりはその後に明らかにされるべきであると考ええる。

3 本遺跡出土瓷器系陶器と太平洋岸域出土瓷器系陶器の比較検討

S E105出土瓷器系陶器甕について観察結果から若干の考察を加えたい。

現在まで山形県内でまとまった形での瓷器系陶器が出土している報告はなく、さらに復元できたという前例はない。また、中世窯の分布域からは太平洋側で瓷器系が圧倒的に多く、日本海側では越前地方を中心にした地域に展開するのみで、日本海側の東北地方では瓷器系窯跡の確認例はない。珠洲系の圧倒的な優勢下に推移しているのが現状である。

そこで、太平洋側で代表的な瓷器系窯跡である、宮城県白石市一本杉窯跡及び築館町熊狩A遺跡の出土遺物との比較を行う機会を得、検討を加えたが産地を特定しうるには至らなかった。

熊狩A遺跡出土甕は口縁部内面に明瞭な受け口をつくりそこに沈線を配する点、体部が肩口と下半に稜線で3分割された成形痕がみえる点等、明らかに本遺跡出土品とは一線を画す。

一本杉窯跡出土甕との比較では、口縁形状やプロポーションが14世紀初頭の一本杉窯跡生産品と酷似していたが、差異も認められることから、産地を特定するに至っていない。現在調査済みの窯跡には同じ胎土を有する遺物が出土していないこと、容積を含め同法量品が存在しないこと、本遺跡出土瓷器系陶器甕の胎土の方が緻密であり、鉄分の吹き出しもない均質な胎土であったことから一本杉窯跡産ではないことは確実である。また、胎土中に常滑産に見られる長石の含有はほとんど観察できなかった。

但し、口縁部のつくり出しやプロポーションの酷似性は注目するに値し、製作そのものが、白石系の工人の手による可能性は残されている。

したがって、現在のところ考えられることとして、本遺跡出土品は消費地からの出土資料であり、太平洋側白石近辺の未調査窯からの流入と考えるか、もしくは在地産の未発見窯での白石系工人の手によって生産されたかであると思われる。しかしながらどちらも現時点では推測の域を出ない。これについては、山形県での中世瓷器系窯跡の存在も含めて、今後各地域での窯跡調査が進み資料が蓄積されることによって結論が出ると思われる。

主な参考文献

菅井進・犬飼安太郎他1988『朝日町の歴史』朝日町教育委員会

飯村均・菊地逸夫他1997『東北地方の在地土器・陶磁器Ⅰ』東北中世考古学会第3回研究大会資料

工藤雅樹・藤沼邦彦・小井川和夫1979『熊狩A窯跡発掘調査報告』東北歴史資料館 資料集Ⅰ

吉岡康暢1981『北陸・東北の中世陶器をめぐる問題』『庄内考古学』第18号

佐藤慎宏1981『山形県の中世陶器について』『庄内考古学』第18号

山形県教育委員会1996『山形県中世城館遺跡調査報告書』第二集（村山地域）

北畠教爾他1984『大江町史』大江町教育委員会

山形県教育委員会1996『分布調査報告書(23)』山形県埋蔵文化財調査報告書第197集